

## 「死」をどう理解する？

平成二十九年十一月 兒玉 敏

人生とは、いったい何だろうか。それは、はっきりと感じられることもあれば、反対に全く感じられないこともあるつまり人生は、「喜び」と「怒り」、「不安」と「希望」、「憧憬しょうけい」と「失望」、そして「生成」と「消滅」というように、正反対の二つの「極」の間で躍動しているのだ。

このことは、長い歴史の中で、変えることのできない運命として受け入れられてきた。たえず何かが生まれてきては、消え去っていく―「生まれること」には「消え去ること」がつきものであり、そしてまた、年を取ることも、それらと切り離すことはできない。

人生の最初の段階、つまり若者には、**無数の可能性**が開かれている。つまり、なんでもできるのだ。無数の可能性の中では、自分は「**死とは無縁の存在**」のように感じられるだろう。それは、将来への展望が開かれていることを存分に感じながら生きる日々であり、さまざまなことを可能にする能力の段階だ。

現代の人々は、八十歳、百歳までも生きることがめずらしくない。その場合人生の半分は四十歳、五十歳の間ということになる。

若いころは、年をとることや死ぬことについて、何かを見たり聞いたりすることに興味がなかった。しかし年を取ってくると、無理に考えないようにでもない限り、おのずと考えてしまうようになる。

中高年の人々は「**経験**という**財産**」を活用することに長けてたけいるのではない

だろうか。この財産を喜んで後輩たちに伝える。創造性に富んだ若者の豊かな発想力と、経験豊富な中高年の思慮深さが合わされば、まさに充実した人生であり、あらゆる「よりよい生き方」の目的ではないだろうか。しかし、自分が六十歳を過ぎたところから「人生の後半」も終わってしまうのは、それほど遠くない将来のことなのだ気づいた。

何もかも先延ばしするのは賢明でないと。自分はまるで不老不死の中に包まれているように感じていたが、実際にはついに私にはあとどれくらい時間が残っているのだろうか。どんな人であれ、いつまでも素晴らしい能力を持ち続けることはできず、いつかは、あらゆる能力を失うことになる。年をとっていくときに、私たちがまず必要とするものは何だろうか。それはもちろん「健康」だ。生まれて長いこと、「健康でいる」というのは当たり前のことだった。ところが人生の後半に突入すると、私たちは自身の健康を保つため、さまざまな努力をしなければならなくなる。「心の健康」、「体の健康」「年齢にあった仕事」を意識的に自分の体を気づかい、十分に栄養を取り、しっかり運動し、体にいいことを心掛けるなど、私たちが健康のためにできることは、たくさんある。「死」をどのように解釈すべきか、近づいてくる人生の終わりに対して「心構え」をすることだ。年をとるにつれ、私たちは他人の死に直面する機会が増えていく、そのたびごとにそれが胸にこたえ、悲しくてたまらなくなることもある。生や死というものが実際にどのようなものであるか、誰も知らないからこ

そ、人は死を不安に思うのだろう。ならば、私たちは、それらをどう解釈するかによつてのみ、死への不安を払拭することができないのではないだろうか。では、「死」は、つまりなくなってしまうと言うことなのだろうか。

「死」に論理的に詳しく書かれた書物はほとんどない。したがって自分でいろいろ調べ科学的な考えと宗教的見方を理解しなければ納得できない。

そこで2009年度のノーベル生理学・医学賞は、生物の染色体の中にある「テロメア」ギリシヤ語で「末端」を意味すると「部分」を意味する機能を発見した研究者たちに授与された。

「若返りの酵素」である「テロメラーゼ」にはテロメアを修復する力がある。この酵素は普通の体細胞にはないが、幹細胞では活性化されテロメアがなくならないようその長さを調節してくれる。そのおかげで幹細胞は実質的には不死の存在となっている。テロメラーゼ薬が開発されれば「若返り療法」として遠い未来の夢として期待されるが、一方テロメラーゼ酵素はがん細胞も無限に増殖されてしまうということだ。（つまり癌を進行させる）京都大学の山中教授の細胞を再生される技術などかみ合わせれば人間死ななくて済むことができる未来があるのではと素人的に思う。

最後の瞬間がいつかくることは、たしかなことだ。しかし、それがどのようなものであるかはさだかでないし、どこで、どのようにしてやってくるのかは、知りようがない。事前に計画を立てておかなければならないにしても、わから

ないものはわからないのだ。けれど想像してみることはできる。そうするのは、死に対する恐怖をなくすためだろうか。

しかし、これまでに死への恐ろしさがなくなったためしはないし、私は宗教を理解した信者でもない、今でも死を恐ろしいものだと思っている。

死に対する考え方や受け入れ方に宗教が存在するのだろうか。人間最後はなにかにすがり受け入れてくれるものを求めている。それが宗教であり、それぞれ各個人が受け入れることのできる宗教を持つことも重要だ。死を迎えるとき受け入れるところがない場合も悲しいことだ。

宗教というより「人間がよりよく生きる教え」、私は宗教学者でもなければ専門家でもありません。浄土真宗の宗祖は親鸞ですが、縁あって龍谷大学大学院を卒業され、本願寺伝導部長となり浄土真宗の仏教辞典の監修や数多くの著書が出版された藤田轍文師との出会いで、多くの書物を読む機会があっただいたい疑問を持つ異端児の自分自身がそれに反対をとなえることはなく教えとして信じている。浄土真宗を信じなさいと言っているわけではない。では、いったい何のために、人は死について考えるのか。それは、何かとても奇異なものが存在するという事に慣れておくためであり、いざ死に直面したときに、人生において何が大切なのか、はっきりわかるようになるためだ。

大切なのは、「終わり」が近づいたときに、自分という存在が有限であることと折り合いをつけることでもある。そして、子供が「自分は世界の一部であ

り、そこから生まれたのだ」と信じているように、「自分は何か大きなもの一部である」と疑わずに信じることだ。このような言動にいたるのは至極自然なことであり、どのみちそれ以外に考えようはほとんどない。

「死」とは世俗的、宗教的にも「超越した経験するための入り口」だと思う。ここでは、死が実際にどのようなものかということは、重要ではない。それは絶対に誰も知りえないことなのだから。重要なのは人それぞれ「死」というものを自分自身にどう言い聞かせるかということだ。

人生の最後で明らかになるのは、「エネルギーこそが、生きている体を死んでいる体と区別するものであり、エネルギーは今まさに、死んでいく自分の体から出ていこうとしている」ということだ。

ここでいうエネルギーとは、決して神秘的で理解不可能なエネルギーだけでなく、一般的によく知られていて計量可能なエネルギー、すなわち熱エネルギーや電気エネルギー、運動エネルギーのことでもある。少なくともこれらの物理学的エネルギーには、ヘルマン・フォン・ヘルムホルツが定式化し、今だに覆されていない誰もが学生時代から知りうる「エネルギー保存の法則」が当てはまる。

この法則によれば、エネルギーがある形態から別の形態に変換されても、その総量は変化しないという。もう少しわかりやすい言葉でいえば、「エネルギーは死なない」のだ。エネルギーを、あえて別の言葉であらわすならば、「魂」

になるだろう。現代以外のすべての文明においては、「魂は死なない」と考えられてきた。

死とともに明らかになるのは、「いかなる存在にも最初から宿っていて、その存在を生かしている本質的なもの、つまり魂は、最後にはふたたびどこかへ消えてしまう」ということだ。しかし、もしそうならば、どこへ消えてしまうのだろうか。最期を迎えた人間はどうなるのだろうか。

人間の生命のエネルギーは、おそらく人間が死んだ後も、まだ「そこ」に残っている。実際にどこにあるか、正確にはわからないが、総量は失われていないのだ。「エネルギー保存の法則」から「本当の死」などというものは存在しないように思われる。

では、エネルギーは「死」をも超えるのだろうか。想像できるのは、「肉体の死」を迎えると、人間の本質であるエネルギーは宇宙を統べる「エネルギーの海」に還っていき、その後、そこから出てきた新しい形態の生命がエネルギーと結びつく、ということだ。このような方法で、死者は、ほかの人間や存在、事物の中でよみがえることができるかもしれない。すなわち「存在の永劫回帰」である。浄土真宗では往生浄土から仏となりまたよみがえる。それはいわゆる「生まれ変わり」ということだろうか。もしかしたらそうかもしれないが、おそらく異なる姿（仏）で生まれてくるだろう。まったく同じ姿のまま生まれ変わるという現象が、これまで確認されたことはない。クローンの時代になって

もなお、それは実現されていない。

そして、再び「私」が生まれると、新たな大きな驚きが始まる。原子それ自体が驚くことではない。それができるのは原子の化合物だけであり、それがいつか「私」ということになるのだ。想像してみるに、息を引き取る瞬間まで、私自身は人生における様々な現象や関連性に驚いているのだろう。

その「私」が消えてなくなると、どれくらいの長さかわからないが、ある期間がすぎた後に、別の化合物がふたたび「私」と言う姿だろう。しかし、それはかつての「私」と同じ存在ではないのだ。

「別の生」へと移行する途中通過する段階、もしかしたら、死は実際に「目覚めた状態」から「眠り」へと移行する。そして、日々の眠りが体を癒してくれるように、「存在の眠り」もまた別の方法で、「新しい生」が始まる前に、「古い生」で負った傷をいやしてくれるのかもしれない。「古い生」で片づけられなかったことは、新たに訪れるであろう「次の生」に委ねることができるかもしれない。そうすれば、「古い生」と「新しい生」を隔てる境界線のこちら側にいるうちから、より朗らかな落ち着きを持って生きることができようだろう。

「新しい生の可能性」を信じることができれば、年を取っていく私たちは、「たった一つの人生」と称するものに、すべてを求めなければならぬというストレスから解放される。宗教的な考え方を重ね合わせればもう少し確かなものになってくる。よくお医者さんが使う「ご臨終です」と言う言葉（漢字）は臨終

とは限りなく「死」に近づくという意味で「死」でなくなることはない。人間息をしなくなっても能は死んでいないとかよく聞く、ある期間がすぎて別の化合物となり宗教で言う「仏となり」またふたたび「私」が存在する。現世では理解しがたいことだがこの世では誰もそこまでしかいくら考えても知りえないことで。私たちは、多くの多神教的でかつ仏教的な精神世界に委ねる。

そうするために「宗教」という「人間がよりよく生きる教え」、死を迎えるとき受け入れる場と考えることが精神世界の大きな役割ではないかと感じている。いずれにしても現世で考えるには限りがあるということだ。死を語っている以上は、本人は生きている。だから死について語っても結論はでない。じつは「生きること」を語るしかない。しかもそれで正しいのだろうと私は思う。でもそれはどうでもいいことだ。むしろ違った意見があると思えるだけで面白い。「自分も歳をとったなあ」という結論になるのかもしれない。